

未来はどうなるか誰も知らない

別にもう一度、振り向いて見る気にはなれなかった。

電車は、四条を過ぎて、三条に着くまで、友達と話しかけるのに答えることはあったが、僕は、すずしい顔を装っていて、何食わぬ表情で、窓の外などに目を向けたが、しかし、非常に気になっていた。

「どこかで会った。誰だろう。」

その瞬間、あっと言う間だった、記憶がよみがえって来たのは。

「ああ、この間、珍しそうに僕の顔を見ていたあの子だ。こちらにも、じっと見たあの子だ。」

しかし、それ依然にも、見たことある様に感じた。

「どこかで、会っている。」

しかし、きれいな人だなあ。」と、その時、僕は思った。

その日から、その後ずっと、いつも、その人が、僕は気になる様である。

それから、顔を合わせた時もあったかも知れないが、確かな記憶はない。僕の方が、いつも見る側だった。